

藩政時代から受け継がれる 独自のものづくり文化

「気仙大工」のふるさとの復興とは

Unique manufacturing culture passed down from Edo period
Reconstruction of hometown of Kesen-daiiku

- 【座談会メンバー】
- 高橋 恒夫氏 東北工業大学 名誉教授、博士(工学)
 - 藤原 出穂氏 気仙大工棟梁、一級建築士、一級技能士
 - 及川 裕敏氏 陸前高田市の建築設計士、一級建築士、一級施工管理技士
 - 島村 亜紀子氏 正会員 前田建設工業(株) 東北支店 土木部土木技術グループ長
- 2016年4月13日(水) 一関文化センター(岩手県)にて

三陸の美しい海のまち、岩手県の陸前高田市には、藩政時代から高度な技能をもった「気仙大工」と呼ばれる大工職人が集住していた。郷土の誇り「気仙大工」について研究者と建築設計士、気仙大工棟梁と語り合う。

気仙大工とは何か

高橋先生が長年研究されてきた「気仙大工」について、教えてくださいませんか？

高橋 — まず「気仙」という地域名は、現在の宮城県気仙沼市とよく混同

「大肝入吉田家住宅」は、茅葺きの大きな主屋や屋敷入口の門など、旧仙台藩領内で唯一、藩政時代の大肝入屋敷の景観をとどめていたからです(写真1)。「大肝入」とは「肝入」(村長)の上位に位置する役職で「郡」を所轄する地方行政長官といえます。地元では「大庄屋」と呼称され象徴的な建物でした。また、今泉集落はこの大肝入吉田家屋敷を中心に計画的につくられた地方の集落構成(写真2)がよく残っています。

「大肝入吉田家住宅」が津波で流出してしまったのは地元にとって大きな損失かと思えます。

高橋 — そうですね。しかし、幸いにも今泉集落については、約40年にわたって記録しておりました。そしてこの記録は資料集として昨年「よみがえる陸前高田市の今泉集落」として刊行し、後世に伝えたいと思っています。

今年度から「大肝入吉田家住宅」の復元再建のプロジェクトが地元陸前高田市で立ち上がり、私と藤原さんもそこに参加します。また、残された部材の調査を藤原さんで行っています。

復元再建する上でどのような課題がありますか？

高橋 — 岩手県重要文化財に指定されていたので、地元では県の文化財指定を継続した復元再建を強く望んでいます。そのためには回収した部材の使用が何割になるのか、回収部材の強度の問題など、克服しなければいけません。



写真1 震災前の「旧大肝入吉田家住宅」



写真2 今泉集落全体の模型 (2013年 高橋研究室製作)

い課題も多くハードルは高いといえます。しかし、今回、かさ上げされたも、集落のほぼ元の位置に気仙大工の総力を挙げて復元再建された暁には、ま

たつて記録しておりました。そしてこの記録は資料集として昨年「よみがえる陸前高田市の今泉集落」として刊行し、後世に伝えたいと思っています。

今年度から「大肝入吉田家住宅」の復元再建のプロジェクトが地元陸前高田市で立ち上がり、私と藤原さんもそこに参加します。また、残された部材の調査を藤原さんで行っています。

復元再建する上でどのような課題がありますか？

高橋 — 岩手県重要文化財に指定されていたので、地元では県の文化財指定を継続した復元再建を強く望んでいます。そのためには回収した部材の使用が何割になるのか、回収部材の強度の問題など、克服しなければいけません。

【座談会メンバー】

TAKAHASHI Tsuneo
1971年東北工業大学建築学科卒業。東北工業大学助手、講師、助教を経て1995年より教授。日本建築史を専門とし、仙台市など多くの地方自治体の文化財保護審議会委員を歴任。博士(工学)。



FUJIWARA Izuho
1948年岩手県陸前高田市生まれ。東海大学第二工学部建設工学科卒業。一級建築士。一級建築技師。出穂建築事務所代表。気仙大工の伝統を守りながら、大庄屋の再生に際し、調査メンバーとして活躍している。陸前高田職業訓練協会会長として若手の育成にも貢献。

OIKAWA Hiroto
1956年岩手県陸前高田市生まれ。足利工業大学工学部建築学科卒業。一級建築士。一級建築施工管理技師。及川建築事務所代表。陸前高田市の伝統工法にこだわった住宅設計を行っている。元陸前高田市職業訓練校講師として、気仙大工の育成に携わっている。

SHIMAMURA Akiko
前田建設工業(株) 東北支店土木部土木技術グループ土木技術グループ長復興工事調整担当。2011年より、岩手県陸前高田市、大船渡市、大槌町において、復旧工事、復興工事、まちづくりCM事業などに従事。

【司会】

それでは、なぜ気仙郡には大工職人が多かったのかというと、彼らは「南行き」といつて地元よりもよその地で働く出稼ぎ大工であったことが明らかになってきました。気仙大工は庶民の大工需要に支えられてきたので、これまでほとんど取り上げられてきませんでした。しかし、全国的に調べて見ると、この種の大工は各地に見いだされ、近年、学術的には「在方集住大工」と認知されてきております。

気仙大工職人の技術的な特徴にはどのようなものがありますか？

高橋 — 出稼ぎ地の大工と競い合うという意味でも高い技術が求められたはずです。気仙大工の民家普請では構造技法として「投掛梁」や「火打梁」などが、造作技法としては「扇垂木」や「扇

さるますが、これは間違いです。旧仙台藩領気仙郡、現在の岩手県陸前高田市や大船渡市、住田町をさします。「気仙大工」とは、この「気仙」地方出身の大工さんたちの総称です。かつて岩手県内では、気仙郡に居住する大工は1892(明治25)年で355人と圧倒的に多かったことがわかっています。

さるますが、これは間違いです。旧仙台藩領気仙郡、現在の岩手県陸前高田市や大船渡市、住田町をさします。「気仙大工」とは、この「気仙」地方出身の大工さんたちの総称です。かつて岩手県内では、気仙郡に居住する大工は1892(明治25)年で355人と圧倒的に多かったことがわかっています。

さるますが、これは間違いです。旧仙台藩領気仙郡、現在の岩手県陸前高田市や大船渡市、住田町をさします。「気仙大工」とは、この「気仙」地方出身の大工さんたちの総称です。かつて岩手県内では、気仙郡に居住する大工は1892(明治25)年で355人と圧倒的に多かったことがわかっています。

まちの復興と まちの誇りの共存

まち並みの再生についてはどのようにお考えですか？

高橋 — これまで効率第一で進めてきましたが、今後はまちの景観にも十分配慮しなければならぬと思います。当初の土蔵群なども参考にしながら調整しなければいけません。

及川 — このまちだかわからないようなただきれいに新しいまち並みになって、人がいなくなったらしょうがないですね。今泉らしさがなくなってしまうような気がします。そこが大切だと思います。

藤原 — そういう意味では、大肝入吉田家屋敷は「けんか七夕」という祭りや並んで地元の「誇り」だったので、何とか早く復元させたいですね。

さるますが、これは間違いです。旧仙台藩領気仙郡、現在の岩手県陸前高田市や大船渡市、住田町をさします。「気仙大工」とは、この「気仙」地方出身の大工さんたちの総称です。かつて岩手県内では、気仙郡に居住する大工は1892(明治25)年で355人と圧倒的に多かったことがわかっています。

状態の縁板張り」や「板長押」などの技法が注目されます。また明治以降は洋風建築もいち早く手がけていたようです。さらに他の地方からさまざまな文化も持ち帰りました。陸前高田市で盛んな果樹の生産もその一例です。

及川 — 先代の話では高度成長期に首都圏でコンクリートの時代になっても活躍した方はいたそうですよ。現場で懸案になっていた難しい型枠を短時間で工夫してみせたそうです。

藩政時代の気仙大工の仕事 大肝入吉田家住宅

「大肝入吉田家住宅」に注目されたのはどのような理由からですか？

高橋 — まず、震災前まで陸前高田市の今泉集落中心部西奥に位置する

慮し、都市計画では、道路の線形が変更されました。

高橋 — かさ上げされても元の位置に復元再建されないと意味がないことを、これまで行政側に強く訴えてきたことが理解されたためだと思います。

最後に読者である土木技術者たちへ期待することをお聞かせください。

高橋 — 土地の造成や道路は、今後のまちづくりの根幹です。50年後、100年後に高く評価される仕事を期待しております。

及川 — ふるさとの復興には、建物や道路だけでなく文化が必要だと思えます。一緒に頑張っていきたいと思います。

藤原 — 今回の震災復興に従事した若い土木技術者と建築技術者との対話の機会を設け、土木と建築の新しい関係を見つければいいですね。

参考文献

- (1) 高橋恒夫…近世在方集住大工の研究、中央公論美術出版、2010年
- (2) 高橋恒夫…気仙大工/東北の大工集団、INAX出版、1992年
- (3) 高橋恒夫・(株)ディーワーク編…よみがえる陸前高田市の今泉集落、東北工業大学建築史研究室・気仙地区コミュニティ推進協議会、2015年

【執筆】三浦昌二